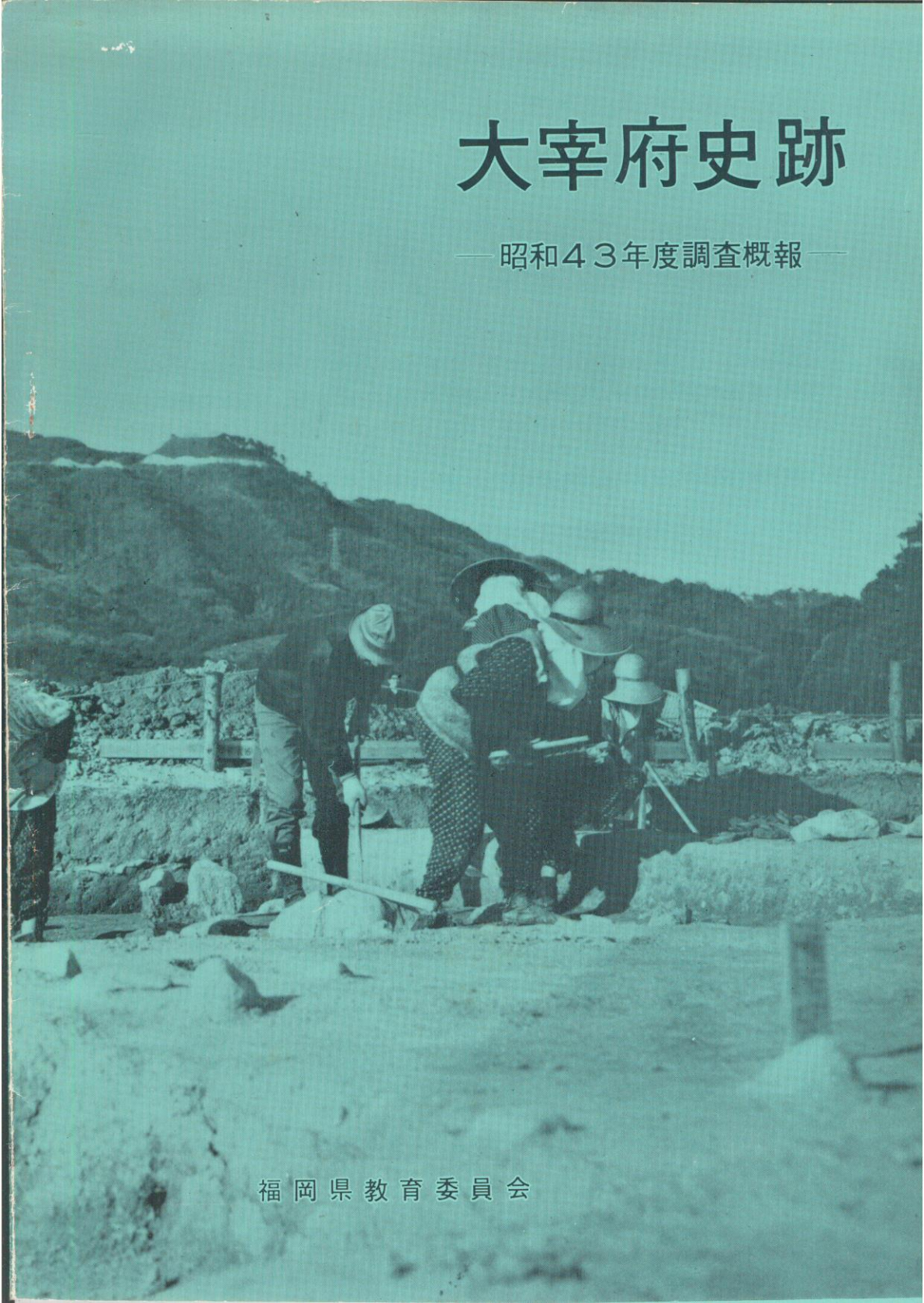
大宰府史跡

―昭和４３年度調査概報―



福岡県教育委員会

発刊のことば

福岡県教育委員会は，このたび，国庫補助をうけて，大宰府史跡の発掘調査を行なった。

調査はひきつづき継続して行なわれる予定であるが，一応の概要をまとめたので，印刷に付して，一般の活用に資する次第である。

この調査にあたっては，大宰府発掘指導委員会議の委員諸先生，並びに具体的な援助をいただいた奈良国立文化財研究所，更に連日御協力をいただいた地元の方々には，感謝の言葉もない。大宰府史跡の様々の問題については，まさに問題解決の出発点にようやく立ったという感じであるが，将来の太宰府町のありかたを希求しながら新らしい史跡の姿を地元民とともに生み出していきたいものである。

尚大宰府発掘指導委員会議の委員は次の諸氏である。

委員長　竹内理三（歴史学）
副委員長　鏡山　猛（考古学）
委　員　井上辰雄，井上光貞，岸俊男，坂本太郎（歴史学）
　　浅野清，太田静六（建築史学）岡崎敬，坪井清足（考古学）
幹　事　小田富士雄（考古学）

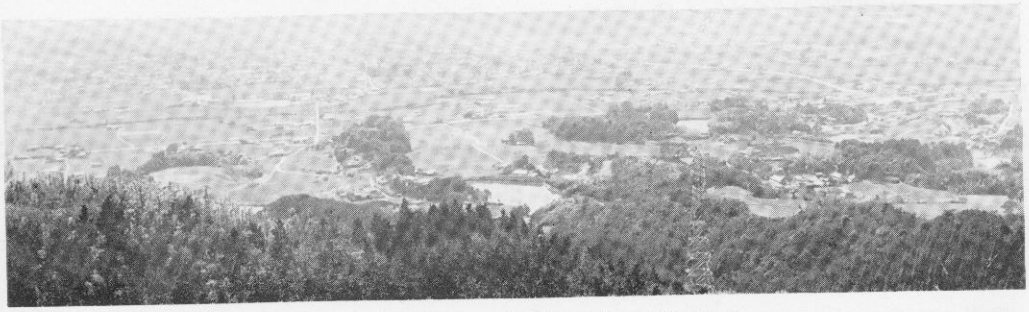
昭和44年3月31日

福岡県教育委員会教育長
吉　久　勝　美

目　次

Ⅰ　発掘調査にいたるまで……1
Ⅱ　発掘調査のあらまし……2
　(1)　遺　構……3
　(2)　出土遺物……8
　　1　土　器……8
　　2　瓦　類……9
Ⅲ　む　す　び……10

本稿の執筆・編集は，県教育委員会藤井功と亀井明徳があたり，図面については，九州大学工学部建築学教室山本輝雄氏の協力を得た。



第1図　大野城から都府楼跡を望む

I　発掘調査にいたるまで

大宰府史跡は，都府楼の名でよく知られているように，現在でも71箇の礎石がほぼ原位置を保ちながらなお存在し，その古代政治史上の重要な位置づけとともに，古くから世人の関心をひいてきた。今日，平城宮跡，多賀城跡とともに日本の三大遺跡とならび称されているのも当然のことである。

然しながら，この頃の全国的な開発の波の前には，やはり大宰府史跡でも例外ではない。福岡市の近郊として急速な都市化現象をみせており，ここでも開発と史跡の保存に関するあらゆる問題をかかえこんでいるのが実状である。

三年前に国から出された史跡の追加指定の問題もいまだに地元との調整ができていない。戦前，大正10年来の史跡行政のありかたが地元民に消すことのできない暗いかげを残しているのである。

結局のところ，史跡の保存は，地元での守る姿勢がないところでは決して成り立たたない。その意味では史跡を守ることが同時に地元民の生活を守ることにつながって行かねばならないのである。

いずれにせよ，問題がここまでくると一地方自治体の限界を超えた問題である。そのような点から言えば，今年度から，福岡県が，国の補助事業で，大宰府史跡の調査に取組んだことは，大宰府史跡の性格を明確にする上でも一歩前進というべきであろう。

43年7月1日・2日に　大宰府発掘調査指導委員会議が開催され，43年度の調査方針が検討され，あわせて，国に対して，史跡地に対する買上げ等の早急な対策と調査の国営移管の要望書が採択された。

一方，地元でも，太宰府町議会の中に，史跡対策特別委員会が構成され，こう着化した諸問題を対話のレールにのせるべく精力的な活動を開始した。

また9月末，今文化庁長官が地元民と都府楼跡で直接話合ったのも，其後の話合いの方向づけを大きく示唆するものであった。

其後の具体的な問題提起から始まる史跡対策特別委員会の活動は更に話合いを一歩進めるものであった。勿論これですべてが解決されたのではなく，話合いのスタートがようやくきられたということなのである。このような中で10月には県副知事，教育長，更に地元民も多数参加して鍬入れ式の運びになり，30人に及ぶ地元の人々の連日の協力により，今日まで調査が継続されてきたのである。

Ⅱ　発掘調査のあらまし

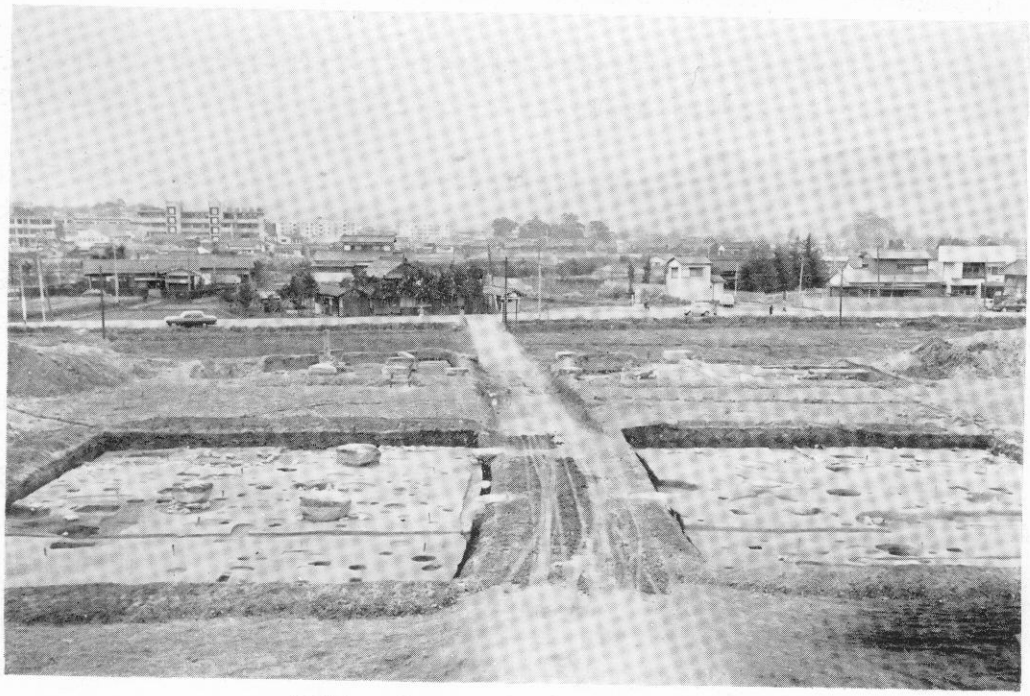
発掘調査は，43年11月の末から始めた。調査は，都府楼跡の南門と中門1400㎡について行なった。調査のねらいは，南門・中門と正殿を通して遺構の軸線を確認し，今後の調査の基準にすることにあった。指導委員会議の討議の中には，学校院跡の調査もあげられていたが，地元の意向もあり，結局都府楼跡の調査が主体となり，現在なお調査が進行中である。

遺構の軸線の方位については，真南北方向から約20′東にふれるのみで，ほぼ真南北方向をとるといってもよい結果であった。

調査の遺構については，大宰府政庁の長い生命を考えれば，何回かの建てかえは当然であるが，発掘の結果，現在地表に見える礎石の下に更に礎石を検出した。礎石の再使用はあるとしても門の基壇そのものを造り変えている。殊に南門においては，当初のものと柱位置も変っている可能性がある。更に現地表の礎石が置かれた時期は，平安期であり，かなり大きな火災の後であると言える。この灰層から墨書土器が一点出土している。

中門には回廊がとりつき，南門には築地がとりついている状況は，従来予想されたものと変らない結果であった。

南門では，最終段階の門の基壇が，前のそれよりも拡張されていることが確認され，更に築地の北側で検出した二つの瓦溜りは，時期差があり，遺物の出土状況から時期をきめる上での若干の手がかりになり得る。



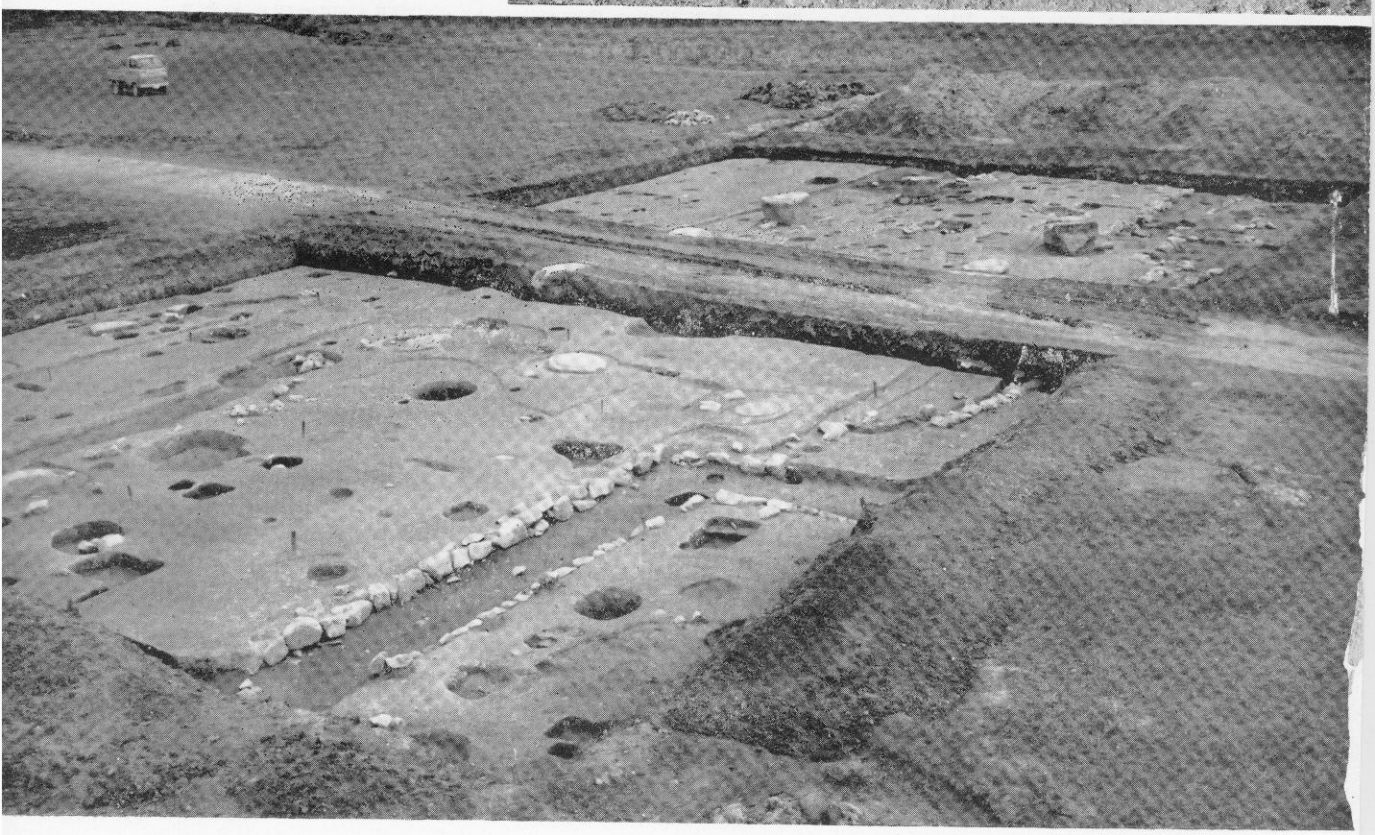
第2図　発掘区全景　北から

第5図

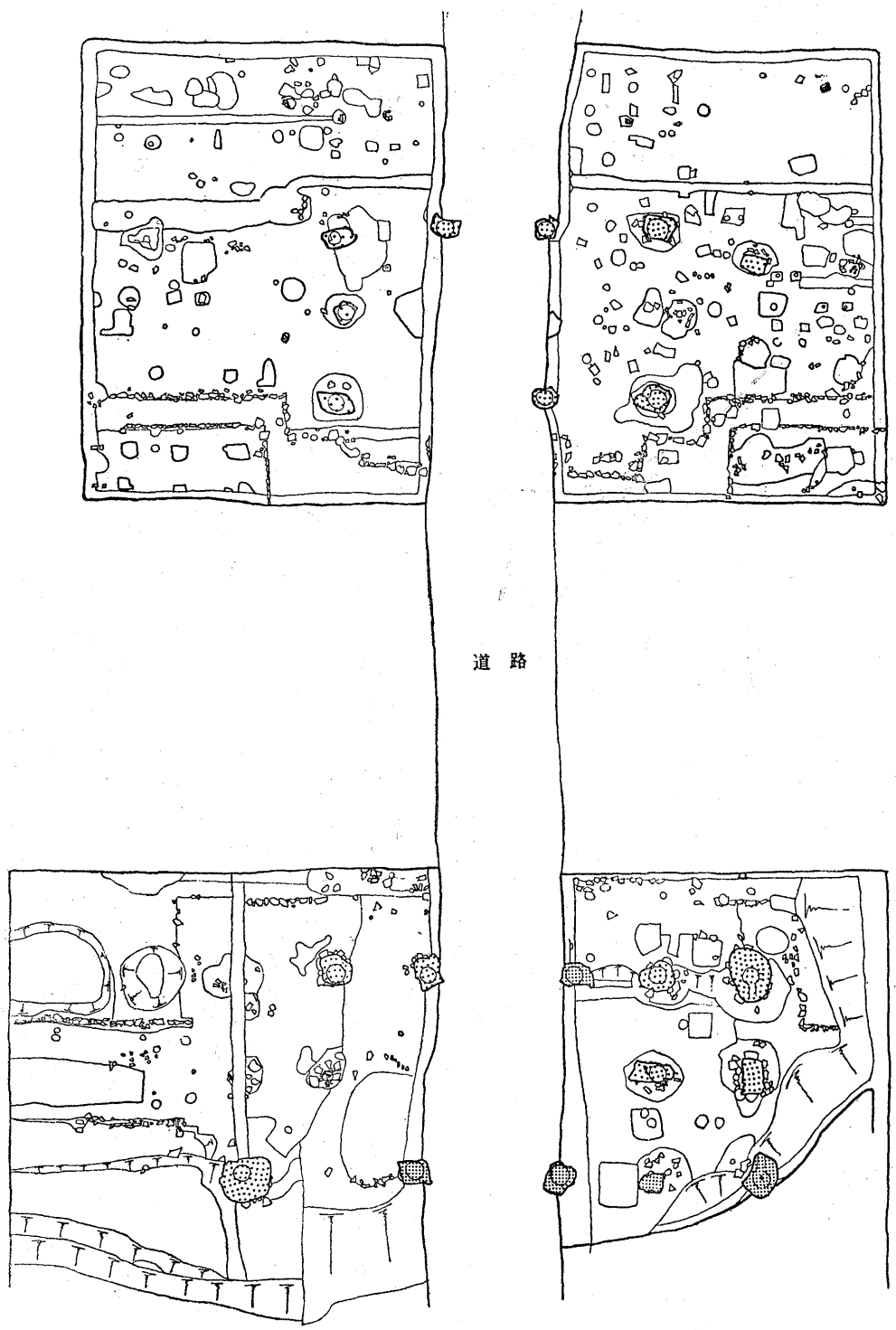
①中門跡東半部
回廊及び階段　南から

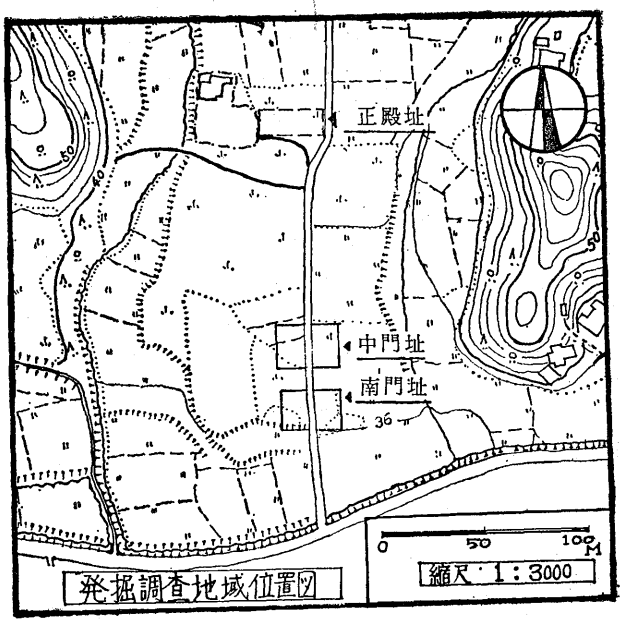
②中門跡下部礎石

③中門跡全景　西から

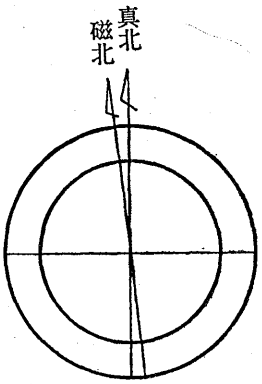


第6図　（上）南門跡西半部築地及び瓦溜　北から
（下）南門跡東半部　北から


道 路



中門址



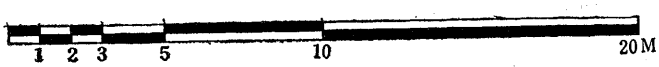
凡 例

現地表の礎石のうち原位置にあるもの

現地表の礎石のうち原位置を動いているもの

南門址

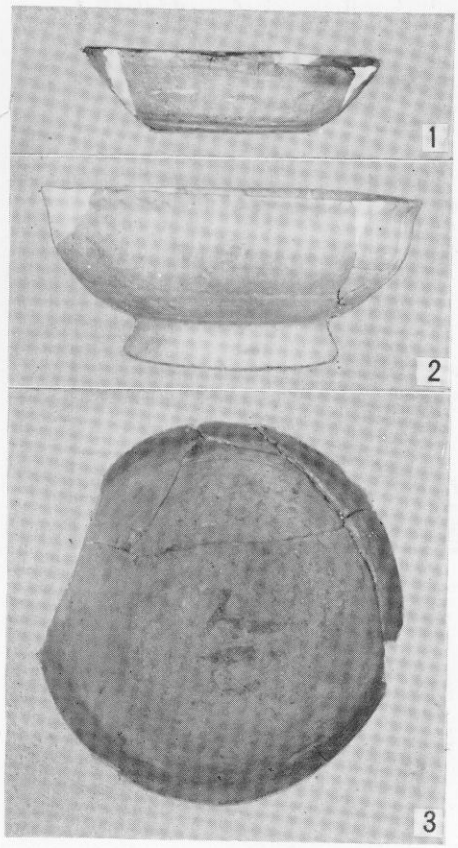
地表下より新発見の礎石



第7図　大宰府史跡発掘調査遺構平面図

(2) 出 土 遺 物

1. 土　器



第8図　出土土師器

出土した土器は土師器と須恵器および少数の施釉陶器と青瓷器である。そのうち土師器が全体の80%以上を占めている。これらの土器は，ほとんど中門西南隅（HM53, 54, 55）および南門西北瓦溜り北側整地層から発見された。また施釉陶器，青瓷器は耕作土からの出土である。土師器，須恵器は器形からそれぞれいくっかに分類できる。

土師器は杯・高杯・椀・皿・大形甕・把手付甕などの器形であり，須恵器は杯・椀蓋・高杯・杯・皿・甕・坩などの器形がある。

HG56，の整地層から出土した椀（**第8図2**）は淡黄色を呈し，軟質の焼成の土師器である。やや外反する付高台で，膨らみのあるたちあがりは口端部でわづかに外反する。体部は内外面とも横ナデによって調整し，底部は不定方向のナデをおこなっている。同種の器形で底部が未調整で粘土紐の凹凸を残しているものもある。9世紀前半に位置づけられる。HF55出土の土師器はいづれも表面に炭の付着が認められる。高台付の椀は断面三角形に近い小形の高台をもち，底部外面は未調整で一種の板おこし痕を残すものもある。10世紀代と推定される。

次に中門西南隅は灰層の堆積が認められ，その灰層の堆積している柱穴より「乞」の墨書のある土師器皿が発見された（**第8図3**）。同じく柱穴中より出土した（**第8図1**）の土師器杯は体部から口縁部にかけてほぼ直線的に外上方にのびる。底部は不調整で粘土紐の継目が明瞭である。口縁部は横ナデをおこなっているが体部下半の未調整である。同じく土師器椀は同種の調整をおこなっており，前述のHG56，HH55出土の椀に較らべて高台は低く小形になっている。これら一群の土器は9世紀代のものとみられさきの整地層出土のものより後出であろう。最後にHM55，54，53におよぶ柱穴より出土の一群の土器は11世紀以降のものと考えられる。現在整理中であり詳細については報告書に記すとして，概略にとどめておく。

その他の遺物

鉄製品がいくつかみられる。

鉄釘　HN45より2本出土した。いづれも先端が欠損しているが復原6寸ほどである。断面方形を呈し，頭部はJ字形である。

直刀　HF56瓦溜りより破片が発見された。身幅2.7㎝，背幅1.1㎝をはかる。

その他鉄板，鉄鏃なども出土した。

2. 瓦　　類

調査遺構の性格上，出土遺物の大部分が瓦類であった。調査は継続中であるが，現在までのところ，軒丸瓦228点，軒平瓦247点および，型敲文による在銘瓦305点，が出土している。軒瓦については，本報告の段階までに型式番号で統一するが，ここでは，とりあえず，若干のものについてふれることでとどめたい。

軒丸瓦　今回の出土例では最も古式に属するものはいわゆる（老司式の２）にあたるものであるが，２点出土したのみである。外に同系と考えられるものが14点ある。

（**第12図１**）は鴻臚館式といわれるもので，出土量は最も多く，57点を数える。使用した瓦の或る時期における主流を占めていたものであろう。

（**第12図６**）単弁16弁，23点，ＨＦ56の瓦溜りからの出土が最も多い中には型ワレのあるものと，ないものがある。平安時代。

第９図　出土鬼瓦

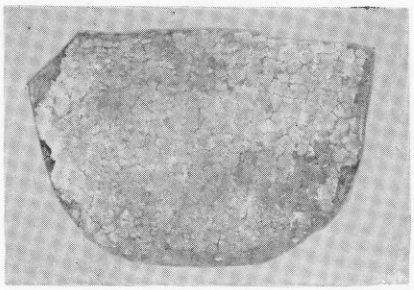
（**第12図８**）単弁20弁，弁の割りつけはあまり良くない，比較的点数が多く33点である。この瓦はＨＦ56の瓦溜からは出土せず，ＨＦ56，灰層等から出土する。後出のものである。

軒平瓦（**第13図２**）は老司式の２で軒丸瓦のそれと組む。９点，出土層はＨＦ56の瓦溜りから耕作土までである。

（**第13図１**）軒丸瓦（第12図１）と組むもので，これも軒丸瓦のそれと同様に最も出土量が多く74点を数える。背面はすべて縄目である。

（**第13図３**）上外区珠文・下外区凸鋸歯文で文様は斜格子をきざんだだけのものであるが，ヘラではなく型で成形したものである。17点。ＨＦ56，ＨＦ55の瓦溜からの出土が多い。

（**第13図５**）上外区珠文，下外区線鋸歯文で，内区文様は偏行唐草文，出土量は８点であるが，ＨＦ55から出土し，ＨＦ56からは出土しない。時期的には軒丸瓦（**第12図２**）と近いものである。



第10図　出土面土瓦

在銘瓦　丸瓦および平瓦を成形する時に使する型敲板に銘を彫りつけたもので，銘の性格は，恐らく工房名と考えられるもの，また寺院名等であるが，それをあげてみると，

1.「平井」（**第14図４**）総数80点，前から平井瓦としてよく知られているものであるが，現在までのところ９通りの書体がある。

2.「佐」（**第14図１**）これもよく知られている瓦であるが，点数も最も多く，137点，正字・逆字・略字と種々であるが，すべて８書体である。

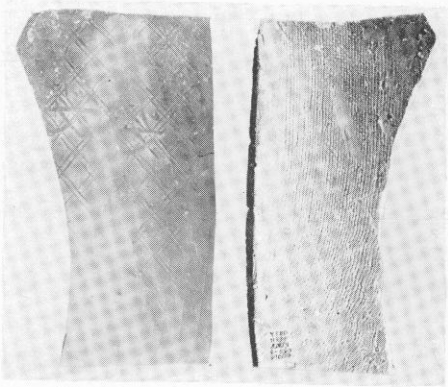
3.「賀茂瓦」（**第14図 5**）38点・正字・逆字・賀の一字等で，6書体ある。

4.「作瓦」といわれているのであるが，むしろ佐瓦の逆字のくずれたものと解した方がよさそうである。一種類27点。

5.「安」（**第14図 2**）逆字，太宰府天満宮の前身安楽寺が焼かせた瓦で，この外「安楽之寺」がある。12点。（写真第11図）

6. 其他少数ではあるが，「門司」（**第14図 6**）「筑前」（**第14図 3**）「筑」等がある。

この外瓦類では，鬼瓦（第9図）面戸瓦（第10図）等が若干出土している。



第11図　文 字 瓦「安」

右裏面4枚造りの粘土のつぎ目が見える

Ⅲ むすび

現在地表に見える礎石が当初のものではなかったという点から，発掘面積は多くはなかったが色々な問題が派生してくる。

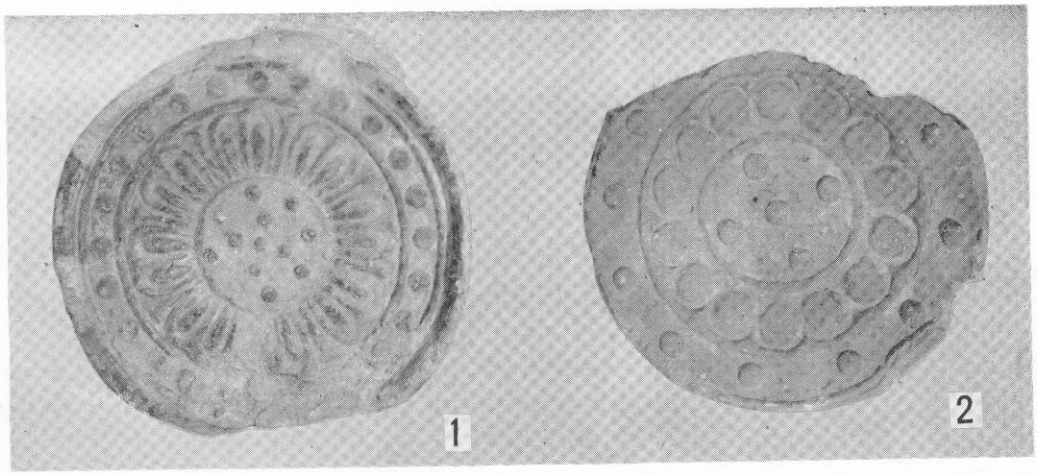
まず**建てかえの問題**であるが，大宰府政庁の長い生命を考えれば，規模の大小はあるにしてもかなりの回数が考えられるだろう。

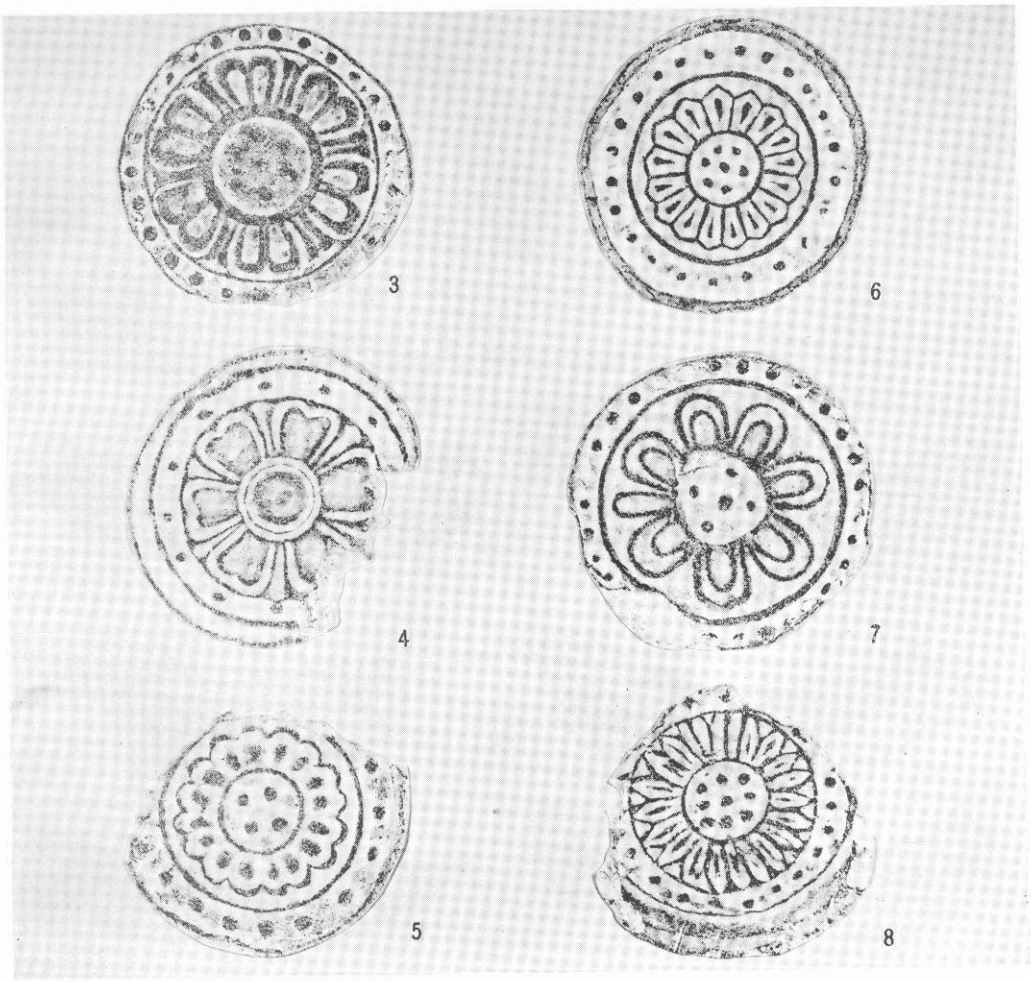
現在までのところ，遺物から見て9世紀と10世紀頃にかなり大規模は改修が行なわれている。特に現在地表に見える少なくも南門・中門位置の礎石群は，大きな火災のあとに再建されたもので，遺物からすれば，ほぼ10世紀頃に置くのが妥当である。更にＨＦ55の瓦溜りから「安楽之寺」在銘の瓦が数点出土していることも，一つの手がかりになり得るだろう。安楽寺の創建については諸説あるが，延喜5年から始まり，延喜19年あたりまでの造営の記事を信用するとすれば，少なくも，ＨＦ55の瓦溜りが埋められるのは10世紀初頭をさかのぼることはないのである。この最終の改修はＨＦ55瓦溜りの遺物よりも更に後出のものであるから，改修前の火災を，941年，藤原純友の兵火に求めてみても大きな不都合はなさそうである。

また，一つの門の調査からのことであるが，殊に南門では，最終段階の基壇が最も大きく，前期のものに盛土，整地して，60㎝程拡張しているのである。つまり最も新らしい段階のものが，いわば大宰府政庁にもっともふさわしい門なのである。勿論，外観と政治権力の動向とは必ずしも一致しないのかもしれないが，律令体制の衰退とともに，外観がより壮大になっていくことを示唆しているのは興味深い事実である。

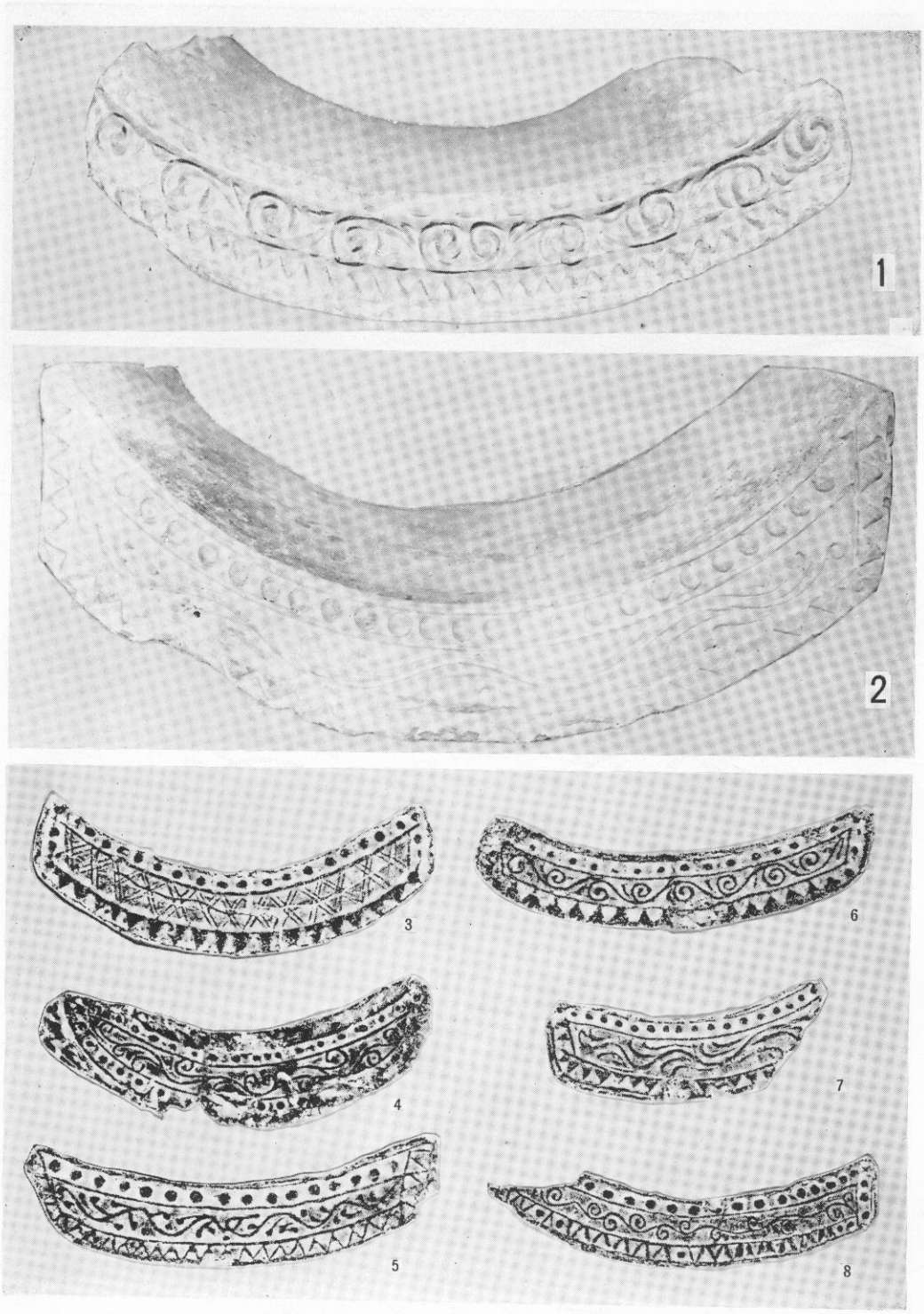
遺物の面では，ここでは在銘瓦の多いのが一つの特色であるが，瓦の製作技術の面からみると，先づ指摘できるのは，ここの平瓦は，今までのところ例外なく**桶巻造り**である，然かも粘土ヒモで巻く例はなく，ほとんどが粘土板を合わせている。（第11図）

この技法は畿内ではすでに奈良時代に，瓦造りの主流から完全にはずれるものであるが，ここでは，平安期まで同様の手法で全く変っていない。





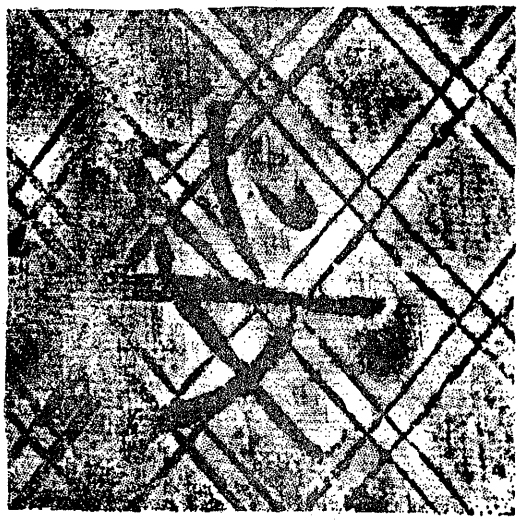
第12図　出　土　軒　丸　瓦

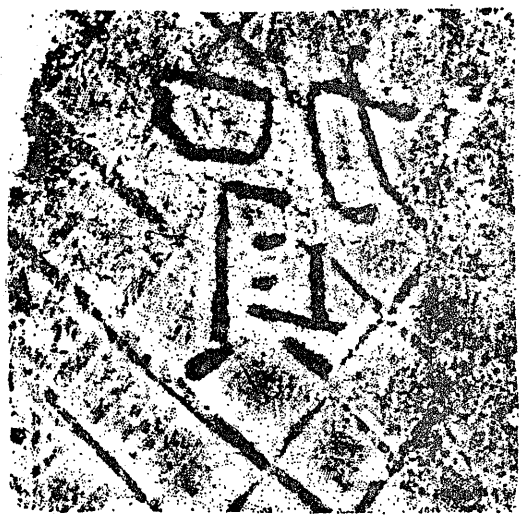


第13図　出　土　軒　平　瓦

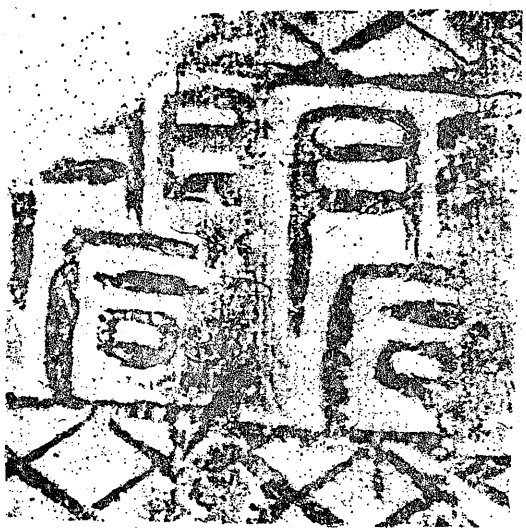
1

4


2


5

3


6

14図　文字瓦